

第十節 日本最初のオランダ海軍留学生

文久二年九月十日（一八六二年十一月一日）、ポンペが帰国の途についた翌日、オランダ商船カリップス号が長崎を出帆した。この商船にはわが国で最初の海軍留学生として洋行する一行十五人が搭乗していた。この時、長崎の養生所からも伊東玄伯及び林研海が随員として加わった。伊東玄伯と林研海の二人は文久元年十月二十四日（一八六一年十一月二十六日）、安藤対馬守の命によって江戸から医学伝習のため、養生所に派遣されていた。

この二人の長崎派遣は文久元年七月、養生所設立が行われた当時から長崎奉行所が幕府に交渉していたところで、奉行所では、執七役として招聘し、その住居も養生所内に設立したのである。七月、奉行所の進達した「長崎養生所江執七役之者御差下之儀申上候書付」が佐藤清五郎を、経て安藤対馬守に届けられたのは七月二十六日（陽暦八月三十一日）であったが、九月十三日（陽暦十月

十六日）、幕府は長崎奉行に「覚」及び別紙を発し、申し渡すところがあった。そして執七役住居の設立については十二月二十七日（一八六二年一月二十六日）、岡部駿河守、高橋美作守、有馬帯刀の連署を以て、養生所及び医学所の新規御普請の完成とその形を検分した報告の中に併記されたのである。

この執七役住居の完成報告より先、十月二十四日（陽暦十一月二十六日）には幕府は伊東玄朴の養子玄伯と林洞海の子研海とを長崎に医学伝習のため派遣した。当時、ポンペの帰国する一年前で、丁度、臨床各科の教科課程が進められている時期であった。（従万延二年至文久二年、文書科事務簿、手頭留、公事方）

奥医師

玄朴養子

支配向江

伊藤玄伯

奥医師
洞海忤

林 研海

右当表江医学為伝習被差遣同所養生所之御用向茂相心得候
様可被遣候

右之通安藤対馬守殿被仰渡候旨江府より申来候条得其意支配之
もの江も可申聞置候

酉 十月廿四日(三字朱)

二人は長崎に到着後、誓詞を奉行所に提出した。これ
を検分した奉行所では文久二年一月十七日(一八六二年
二月十五日)、宿次により「当地江為医学伝習被差遣候
伊東玄伯林研海誓詞見届候趣申上候書付」を幕府に報じ
た。幕府は二月二十二日(陽曆三月二十二日)に受領した
が、ポンペの帰国に伴い、二人は共にオランダ留学の機
会を得、海軍留学生等と行を共にしたのである。

支配向江

御小姓組

小栗豊後守組

御軍艦組出役

内田恒次郎

小普請組

柴田能登守支配

亀兵衛二男

同

榎本釜次郎

奥火之番

三浦美作守組与力

吉沢源次郎弟

同

赤松大次郎

久世大和守家来

同

田口俊平

松平三河守家来

蕃書調所出役教授手伝

津田真一郎

堀田云之丞家来

佐波銀次郎厄介

西 周助

諸職人

八九人

右者今般和蘭陀国江御詔蒸氣船壳艘製作中諸術為研究被差遣
候付咸臨丸ニ乗組当月上旬江戸出帆いたし出崎差船之上異国
便ニ而出帆いたし候旨申来候間為心得相違候支配之もの江も
可申聞置候

戊 六月

第十節 日本最初のオランダ海軍留學生

支配向江

奥医師

長春院養子

伊東玄伯

同

洞海粹

林研海

右之者共此度阿蘭陀江軍艦御詔相成為伝習御軍艦組之者共彼
国便船江乗組被差遣候ニ付船中病用も相兼医術為伝習可被差
遣候間御軍艦組之者土地着之上一同彼国便船江乗組直ニ当地
ニ罷越候様板倉周防守殿被仰渡候段從江府申来候間支配之者
江も可申聞置候

戊 六 月

支配向江

奥医師

静海粹

戸塚静伯

同

道安粹

佐藤道碩

西洋医学所頭取

見習

大槻玄俊

右之者共長崎表江為伝習罷越候伊藤玄伯林研海阿蘭陀国江被
差遣松本良順儀ハ医学所御用有之候ニ付此節出府之儀相違候

間右代リ長崎表養生所御用兼為伝習被差遣候旨板倉周防守殿
被仰渡候段從江府申来候間支配之者江も可申聞置候

戊 六 月

さて、この二人の代りに戸塚静伯、佐藤道碩、大槻玄
俊が派遣されて、安政五年七月八日（一八五八年八月十六
日）の蘭医学習に關する幕府の方針は変更されず、又、文
久元年の有吉周平の書簡に見られるようなオランダ人に
よる医学伝習の廃止も單なる政治的な策動に過ぎなかつ
たことを示しているのである。一方、江戸では蕃書取調
所が一ツ橋門外に移され、洋学調所と改称され、修業を
奨励された文久二年五月には外交上、兵備の充実、簡易
質直の目的を以て政策変革の方針が決定されたが、又、
政治改革、経費節約の令が下された。オランダ海軍留學
生の決定もこうした時代を背景としているが、この六月
には洋書調所稽古希望者は万石以下の陪臣の者にも、兩
文典句読修了の者に限り修学を許容されるべき旨が布告
された。そして普請奉行、小普請奉行の廃止に伴う政治
機構改革が頻りに行われたのも海軍留學の決定した六月

であつた。閏八月には開港に伴う世情の変改によって、上下一致して国威の振興に努力し、文武の充実を心掛けるべき訓令が示され、又、医師召出の制を改め、その人一代限り扶持する旨を令された。そして医師に対しては西洋医学の研究が奨励されたのである。

ここで再びオランダ海軍留学生一行のことに戻ろう。

文久二年九月十一日（一八六二年十一月二日）、ポンペの搭乗したヤコブ・エン・アンナ号の跡を追って長崎を出帆したカリッブス号は希望に満ちたわが国最初の海軍留学生をヨーロッパに運び去った。この留学生たちはボードウィンの紹介状を持っていたが、プロ・リアル島で難破し、バタビアを経てオランダのブロウルス・ハーヘンに着いたのは文久三年四月十六日（一八六三年六月二日）であつた。その翌々日、ロッテルダムに着いた。ポンペはこの留学生一行を訪問し、自分は今度、カッテンダイケ海軍大臣から日本留学生掛を命ぜられたと云つた。同月二十四日（陽暦六月十日）ポンペはオランダ外務大臣より与えられた注意書を留学生達に届けたが、それに

基いて留学生たちは専門別に分散、研究をすることになった。ハーグへ移つたものは内田恒次郎（海軍諸術）、榎本釜次郎（同上及び機関学）、沢太郎左右エ門（同上及び砲術）、赤松大三郎（同上及び造船学）、田口俊平（同上及び測量学）、伊東玄伯（医学）、林研海（医学）の七名、ライデン大学に残つたのは津田真一郎（法律、国際法、財政学、統計学）、西周助（同上）の二名と水夫頭古川庄八以下六名で、ライデン市において語学と専門の科目の実習に努めた。この留学生たちの世話一切をポンペが受持っていたのである。伊東玄伯（後の方成）及び林研海は元來長崎病院詰で、ポンペの門人であつたが、この二人はニュージーフのオランダ海軍鎮守府病院に入る前に、物理学、化学、人身窮理学などに関するポンペの講義をきいた。留学生たちは学問上のことのみならず、生活上のことまでポンペに相談するのが常であつた。ハーグ留学の一行は、各商店で物を購入するのに前金払であるとか、商品も一個宛しか見せないとか、料理店、カフェなどでも前金を取られて難儀したので、これをポン

第十節 日本最初のオランダ海軍留学生

ペに質問したところ、ポンペは「誠に遺憾だが、先年、日本使節に随行して来た小者のうち、元々言葉が通じないので、各商店から勝手に商品を持ち去ったり、無銭飲食などしていたため、各商店とも日本人にはこりこりしている。もうしばらく辛抱してくれ、いずれ元に戻ろう」と云った。又、道路で、小学生たちが、留学生一行について来て、必ず何かバー／＼ギャー／＼唱い囃すので、それもポンペに質問した。ポンペはこれも前と同じ時に流行した諷刺歌だと説明し、その歌詞を教えてくれた。

世の中に厚い皮は数々あるが

日本人の面の皮ほど厚いものはなからう

これを太鼓に張ったなら

きつとよい音が出るだろう

この歌は留学生一行を憤激させた数篇中の一篇である。なお、これは明治三十四年五月、沢太郎左衛門の子息沢鑑之丞氏がハーグに行った時も唱われていたという。

ポンペは留学生の接待を始めて、約一ヶ月後のある朝、新聞紙を手にして各宿舎に来て「皆さん悦んで下さい。

今朝の新聞にこんな愉快な記事がありますよ」と云ってにこにこしながら朝刊紙中の次の記事をみせた。

日本人の行為に関し、先年渡来した使節の随行員中に下流の人物が多かつたのでその所行は極めて陋劣で、市民に頗る迷惑をかけ、何れも蛇蝎の如く思っていたが、今度留学生として渡来中の日本人はそれとは雲泥の差のある真の紳士である。故に、各商店は云うに及ばず、何れにても相当の待遇をするのが至当である。

この他、ツウエーヤツパーネスと称する歌も伝えられているが、これは日本人は二人でバスを抱えて歩く、オランダでは乞食が一人でもバスは持つて行くのにという意味の歌である。日本人の一人歩き出来ないのを嘲笑したものであるが、ポンペの指導が適当であったためか、林等の洋行の際にはこれ等の歌を消滅させる程に立派な態度であったので、大いに日本人の名譽を挽回した訳である。これは沢太郎左衛門及び林若樹阿氏の筆録に示されている。オランダに滞在中の伊東玄伯及び林研海の動静については幕末外交関係文書に散見され、それぞれ伝記も出ているので、ここでは省略する。

ここで帰国後のポンペについて述べると、一八六四年（元治元年）、三十三才の時、ハーグに病院を開業し、*Henriette Lou-sie de Moulin* と結婚し、翌年、ブレダ近郊ギーメンケンで長男を儲けた。一八六六年（慶応二年）、ハーグにコレラが流行した時には、長崎における経験に基き、その撲滅に尽力し、この年、二男を得たが、一八六七年（慶応三年）にはハーグ参事会委員になり、シウエンニングゲン海水浴場やハーグ病院などの監督を依託された。一方、一八六三年（文久三年）、スイスのジュネーブに赤十字規約十箇条が決議され、翌年、ヨーロッパ十六箇国の政府代表者がジュネーブで会議を開き、慎重審議の結果、スイス外十一箇国の間に赤十字条約が成立し、赤十字国際委員が設置された。この時、ポンペはハーグに在って第一回の委員になり、赤十字社のために四百の病床を備えた移動病院を組織し、一八七〇年八月（明治三年）の普仏戦争の際には、オランダ国王の命によって、三時間のうちに赤十字社病院隊と共に戦地に赴き、三十

時間後にはドイツのザールブリュッケンで負傷者を収容した兵営内で二百の病床を備えた仮病院を開設し、数日後にはベット数を六百に増加した。ポンペの率いるオランダの赤十字病院は、最も早く戦場に到着したので、迅速、果敢なポンペの処置が多くの人々に感銘を与え、その功績は広く認識された。

一八七五年（明治八年）、ロシア駐劄日本全権公使榎本武揚の依頼によって、その外交顧問となり、セント・ペテルスブルグに赴き、翌々年まで同地に滞在し、日本とロシアの外交に関与し、大いに斡旋するところがあり、そのため、日本から勲四等旭日小綬章を贈られた。一八七七年（明治十年）、帰国後、南オランダのベルゲン・オブ・ツォームに牡蠣の養殖事業を創め、ベルギーのブラッセルとオランダの間を往復していたが、晩年、事業に失敗したと云う。

なお、一八八七年（明治二十年）九月二十三日、ドイツのカルス・ルーエにおいて開催された第四回万国赤十字会議にオランダ代表として出席したポンペは、席上、

第十節 日本最初のオランダ海軍留学生

同年五月二十四日に始めて博愛社を改めて、日本赤十字社と称し、委員を派遣した日本側代表（日本赤十字社幹事松平乗承及び陸軍軍医総監兼日本赤十字社委員囑托石黒忠恵）を援けて立場を有利に導いたのである。これによって日本で自分の教導する学生の指導を怠らなかつたように異境に在ってもなお指導する愛情を失わなかつたポンペの姿が覗われよう。そして一九〇八年（明治四十一年）十月七日、七十九才で歿したが、長い生涯のうち、青壮年期を長崎に滞在し、わが国の医学の進歩に尽した功績は名声のみ高いシーボルトに比して遜色のない偉大なものであった。勲章や称号を贈った国としてはわが国のみならず、ロシア、フランス、ポルトガルその他があり、諸国の赤十字社章を所持し、オランダのみならず、ロンドン、パリなどの諸学会の名誉会員であった。